

健康・医療・介護情報利活用検討会
健診等情報利活用ワーキンググループ
民間利活用作業班（第 17 回）

■日時：令和 8 年 3 月 5 日（木）15:00～17:00

■場所：オンラインによる開催

■出席者※敬称略

（構成員名（五十音順））

いのうえ 井上	ひろゆき 裕之	一般社団法人 保健医療福祉情報システム工業会 保健福祉システム部会 健康支援システム委員会 委員長
いわみ 石見	たく 拓	京都大学大学院医学研究科 予防医療学分野 教授
おちあい 落合	たかふみ 孝文	渥美坂井法律事務所・外国法共同事業 シニアパートナー弁護士 プロトタイプ政策研究所 所長
おの 小野	てつお 寺 哲夫	公益社団法人 日本歯科医師会 常務理事
かづま 鹿妻	ひろゆき 洋之	PHR サービス事業協会 戦略アドバイザー・産業戦略 WG リーダー
かんの 菅野	かずや 和弥	独立行政法人 情報処理推進機構 セキュリティセンターリスクマネジメント部 部長
きたおか 北岡	ゆうき 有喜	社会医療法人 岡本病院財団 京都岡本記念病院 副院長
くろせ 黒瀬	いわお 巖	公益社団法人 日本医師会 常任理事
たなか 田中	ちひろ 千尋	公益社団法人 日本薬剤師会 常務理事
つめなが 爪長	みなこ 美菜子	健康長寿産業連合会 WG 2 座長
みつぎ 光城	もとひろ 元博	一般社団法人 電子情報技術産業協会 ヘルスケア IT 研究会 主査
みやた 宮田	ひろあき 裕章	慶應義塾大学 医学部医療政策・管理学教室 教授
もろおか 諸岡	あゆみ 歩	公益社団法人 日本栄養士会 理事
やまもと 山本	りゅういち 隆一	一般財団法人 医療情報システム開発センター 理事長【主査】

（事務局）

総務省 情報流通行政局 地域通信振興課 デジタル経済推進室
厚生労働省 健康・生活衛生局 健康課
経済産業省 商務・サービスグループ ヘルスケア産業課
デジタル庁 国民向けサービスグループ
EY ストラテジー・アンド・コンサルティング株式会社

■議事内容

議題（１）マイナポータル API に関連する最近の動向について

（事務局より資料２の説明）

- 【主査】ありがとうございました。後ほど質疑の時間を取っていますので、続いて、議題（２）について、総務省より、資料３「健康・医療情報の活用拡大について」の説明をお願いします。

議題（２）健康・医療情報の活用拡大について

（事務局より資料３の説明）

- 【主査】ありがとうございました。それでは只今から、議題（１）（２）に関しましてご意見がありましたら賜りたいと思います。いかがでしょうか。
- 【構成員】今回はマイナポータルから取得する情報の話を中心に、制約等を含めた課題をご提示いただいたと理解しています。ただ、総務省の説明の通り、レコメンデーションはライフログや、マイナポータル以外から入手された情報も含め作成されていく場合が多くあるので、実際に入ってきた情報がどこから入手されたものかというものについて、業者を渡り歩く形まで含めて、トレースをどこまで行っていくのかという課題が今後生じるかと考えています。その意味でマイナポータルというものはあくまでも取り込み口の一つであり、取り込んだ後の責任分界点をどこに設けていくのかも今後は考えていく必要があるのではないかと感じました。
- 【事務局】ご指摘の点は大変重要な点であり、経済産業省・デジタル庁と共に、責任分界点についても重要であると認識をしています。
- 【構成員】資料３の３ページ右側の図について、現状のものだとマイナポータルと利用者が１対１になってしまっているのが、マイナポータルにつながっているサービス群の先に更に利用者が広がっていくイメージの絵の方が、ユースケースが増えていく形を表現できて良いのではないかと思います。また８ページについて、今後次のステップでさらに広げるためには、まさに AMED 事業のような基盤を活用したりしながら、PHR サービス同士もつながり、企業ともつながるユースケースが増えていくといいなと思っています。つながったことで、それぞれのサービスや利用者のメリットが生まれてくるユースケースを増やしていくという方向にしていきたいと思っていますし、紹介していただきたいと思います。
- 【事務局】資料について承知しました。PHR のデータ流通基盤も引き続き当省として助力してまいりたいと思っています。
- 【構成員】マイナポータル全体のアクティブユーザー数・利用者の年代の分布などプロフィールのデータはありますか。
- 【主査】それはマイナポータル API を利用しているユーザーという意味ですか。

- 【構成員】 その通りです。
- 【事務局】 マイナポータル API へのアクセス数のデータはありますが、手元にはないので後ほど確認します。年齢などは技術的には取得可能ですが、国がどこまで分析して良いのかという問題が絡むため取得しておらず、限られた領域で分析をしているのが現状です。
- 【構成員】 Ubie 株式会社のサービスなどがキラーユースケースだと思いますが、まずバリューがある活用事例があって、その認知でマイナポータル API が広がっていけば良いと思っています。国側として API をどう開いていくか、規制をどうすべきかといった問題もあるので、価値ある活用を安全に広げていくうえでも、事例ごとに分析ができればいいと思っています。年代の話をしたのは、私が関わっていた万博の事例で、電子チケット・電子マネーが利用できないケースが懸念されていたのですが、実際には用意した紙のチケットとお金がほぼ使われなかったということがありました。つまり、楽しいことであればみんなデジタルを利用できたということであり、良いユースケースさえ認知されればマイナポータルの価値は間違いなく広がるのではないかと思います。色々な素晴らしいユースケースを支援いただければと思います。
- 【構成員】 国の方で年齢・性別・アクセス数を直接見るのは難しいかもしれませんが、マイナポータル API に接続している民間事業者サイドに分析・データ提供の依頼をかけてみるのはどうですか。高齢者の利用状況など、サービスの利活用状況についての情報が得られると、次につながりやすいのではないかと思います。
- 【主査】 議題（４）のところでご意見・ご質問いただいても結構ですので、次に進めたいと思います。
それでは議題（３）について、まずは株式会社くすりの窓口様より、「EPARK お薬手帳アプリ」の説明をお願いします。

議題（３） マイナポータル API を活用した民間 PHR サービスの先行事例について

（株式会社くすりの窓口様より資料４－１の説明）

- 【株式会社くすりの窓口】 当社からは、「EPARK お薬手帳アプリ」というアプリケーションを活用したサービスのご紹介をさせていただければと思います。
簡単ではありますが、当社のお薬手帳アプリのコンセプトの部分からご説明できればと思います。もともと 2016 年から、紙のお薬手帳に代わってアプリで管理できるお薬手帳という形でサービスを開始しており、当初はお薬の記録管理と、後は薬局様を中心にした予約サービスという 2 本軸でサービスを展開しておりました。2022 年から、マイナポータルを利用して情報を取得するところを本格化させて、情報がどんどん増えていったという背景があります。その情報を、記録・管理だけではなく、もっと活用できないかというところで、機能アップデートを常々しているという状況です。

具体的に、現状マイナポータルからは、薬剤情報と健康診断の結果、最後に予防接種記録という形で3つの情報を取得しています。この後、お薬の情報、健康診断の情報を使ったサービスの事例をご紹介します。

4 ページ目です。まず左から、ピンク色のところです。飲み合わせチェックという機能がありまして、こちらに関しては、記録されたお薬の情報を使い、添付文書の情報と照らし合わせて、飲み合わせの禁忌があるかどうかをチェックし、アラートを出すという機能になっています。医療用の医薬品情報に関してはマイナポータルから取得していますが、他にドラッグストアで購入したOTC薬品との飲み合わせの確認もできます。そういった形で、患者様の不安を払拭しながら、医療従事者様との相談や確認のきっかけ作りをしているという機能です。

真ん中、こちらは医療費の管理機能となります。こちらもマイナポータルから取得した薬剤情報を活用しながら、その方々の年間、月間の医療費の確認が可能です。先発品を服用されている方に関しましては、ジェネリックに切り替えるといくらぐらい医療費の削減になるという形で、医療費のシミュレーション機能も有しており、金銭面で患者様をサポートする機能になっています。

一番右は、マイナポータルと直接的には関係ないですが、検診結果や、薬剤情報を取得した方が、日常的に血圧や体重を記録し、その後、医療機関にその情報を提供するにあたってのPHRの記録をする機能となっています。こちら今画面に映させていただいているのは血圧手帳というコンテンツになっていますが、他にはアトピーを画像と一緒に記録して症状の状態が可視化できる管理機能や、頭痛の予測を気圧の変動を見ながら取得する頭痛の管理機能等があり、それぞれの症状に合わせて機能を提供しているという状況です。

5 ページ目です。健康診断結果を活用したサービスの事例です。先ほどご紹介も少しありましたが、疾病予測をする機能をリリースしています。健康診断結果をもとに生活習慣病を中心とした、五年後の疾病予測を可視化しており、これを見ていただくことで、そもそも病気にかかられていない方の発病の予防につなげることや、今持病を抱えている方の重症度を抑えるきっかけ作りになればという形で機能展開しています。右下の部分が、この予測と一緒に、からだ基礎年齢という形で健康診断結果を年齢化して、より自分の状態がわかりやすく意識できるというところも機能化しています。こういった情報を提供することで、そもそもあまり健康に意識が向いていなかった方に対して、意識をしていただくきっかけづくりをしているというような機能になっています。

6 ページ目です。最後になりますが、現状、当社では、薬局を中心にしたサービス展開が多くなっていますが、今後病院やクリニックでもご利用が広げられるシーンを増やし、患者治療の手助けになるような機能を提供していこうと考えています。具体的には、人間ドックや、通常の外来などの診察の予約をしていただき、その後の診察結果や検診の結果、検査結果をアプリと連携し日常的に健康サポートをしていくというところも、包括的に担っていければと考えており、ここに今後は力を当てていくという形

で、機能改修を進めている状況です。

簡単ではございますが、ご紹介は以上になります。ありがとうございました。

- 【主査】 それでは続いて、Ubie 株式会社様より、「医療 AI パートナー『ユビー』」の説明をお願いします。

(Ubie 株式会社様より資料 4－2 の説明)

- 【Ubie 株式会社】 弊社からは、「マイナポータル API 活用による生活者の行動支援の変容の支援」と題しまして、取り組みと展望をお話しさせていただければと思います。プロダクトプラットフォーム部の PHR・データ統合戦略リードからご説明します。

4 ページ目です。最初に簡単に弊社のご紹介をさせていただければと思います。弊社は 2017 年に創業しました。医師とエンジニアが共同創業したヘルステック企業で、テクノロジーで人々を適切な医療に案内するというミッションで事業を進めています。

5 ページ目です。弊社では、3 つの事業を展開しており、生活者患者さん向け事業、他に医療機関向け事業、製薬企業向け事業も進めていますが、本日はマイナポータル API をご利用させていただいている、生活者向けサービスについてお話できればと思います。

6 ページ目です。弊社の toC サービスのこれまでの歩みですが、2020 年に症状検索サービスとしてスタートし、2023 年にマイナポータル連携を開始しました。その後、2025 年にこのサービスは「AI パートナーサービス」というものに進化し、同じ頃に、基幹連携 API に対応しました。マイナポータル API を活用できる環境を整えていたおかげでこの AI パートナーサービスの進化が加速したと感じておりまして、本日そちらの事例をお話しさせていただければと思います。

7 ページ目です。こちらは 2020 年当初から提供しています症状検索サービスです。自分の症状をいくつか入力すると、関連する病名や近隣の医療機関の検索ができるというサービスです。

8 ページ目です。こちらが昨年リリースしたサービスで、2025 年に医療相談に特化した AI パートナーというサービスに全面的に進化いたしました。こちらにマイナポータル API 由来のデータが加わることで、汎用 AI ではなく、専用の AI パートナーで医療に特化した相談ができるというものとして、使っていただいているものになります。画面にあるように、チャットライクの形式で色々と入力していくと、AI と話ができ、相談ができるというサービスになっています。

9 ページ目です。こちらはベータ版の頃に実施した調査にはなりますが、AI パートナーをご利用いただいた方で、ユビーを利用したことで受診を決意したという方が 66% いらっしゃいます。またユビーで話した内容を診察時医師との対話に活用したと回答されている方が 95% に上っています。サンプル数は限定的ですが、実際に医療の現場で行動変容に活用していただいているという手応えを感じています。

11 ページ目です。続けて、マイナポータル API を使うことで、どのようにユースケ

ースが広がっているのかをご紹介できればと思います。今、弊社は医療保険情報取得 API を利用しており、薬剤・処方・調剤・医療費通知情報、特定健診の情報を取得し、期間連携 API に対応していますので、ユーザーの操作と同意を一度していただくと、原則毎日自動でデータを取得してサービスに反映しています。ユーザーが意識しなくても、最新の情報がサービスに反映されているという仕組みが提供されていることが、これからお話しする事例の体験の価値の根幹になっているかと思っています。

12 ページ目です。AI パートナーがどのようにデータを使っているかについてです。マイナポータル API から受け取るデータ、ユーザーが手入力した情報、外部のサービスから連携されるバイタル情報、アップロードされた画像等々を AI パートナーに入力することで、AI との相談や、健康管理受診時に医師に共有する情報を作ることに活用されます。

13 ページ目です。具体的な機能の例をいくつか掲載しています。左側はマイナポータル API 由来の調剤情報を元にした、調剤の記録、お薬の記録の機能です。いつ、どういう薬局でどのような薬が調剤されたのかがいつでも管理可能です。右側は受診メモ機能という機能で、AI と話した内容や、そこに引用されるマイナポータル由来の情報を上手くまとめて、次回診察時に医師に話す内容をまとめてくれる機能です。こちらは読みながら、あるいは医師に見せながら相談していただいているという方もいらっしゃると思います。

14 ページ目です。ここから本日最もお伝えしたい部分ですが、マイナポータル由来のデータがユーザーの実際の行動変容につながった事例を2つほどご紹介します。

15 ページ目です。まず1つ目の事例で、マイナポータル由来の調剤履歴をきっかけに、ユーザーの重症化に気がつき、ユーザーに対して受診を促進できたという事例をご紹介します。左から会話形式になっておりまして、あるユーザーが別の症状で相談中に、「そういえば最近、喘息発作もひどい」ということを入力されました。AI パートナーがそのタイミングでマイナポータルから入ってきている調剤歴を確認してみたところ、従来の吸入薬に加えて、経口ステロイドであるプレドニンが新規で複数処方されているということに気がつきました。

これをきっかけに、症状の悪化傾向を読み取った AI が、今の症状はどんな具合なのか、ゼーゼーしていないか、薬はちゃんと飲めているのかを聞き取り、ユーザーが、「薬は使っているけれども、ゼーゼーして話しづらい」と回答したことで、AI が危険な状態かもしれないと情報提供を行い、救急車を呼ぶか、あるいはかかりつけ病院に電話することを提案しました。ユーザーの方はすぐに電話や受診することを戸惑われましたが、AI が、「夜辛くなったら救急車を呼ぶとか、もし待てるのであれば明日の朝病院行くことを考えてみて」と提案し、実際にこのユーザーの方は翌日受診に至りました。

一番右の列です。後日、「翌朝に病院に行って血液検査とレントゲンを撮ってもらった」ということを AI に入力いただき、「薬は変わっていないが、吸入指示は変わりましたか」と AI が聞いたところ、「吸入の回数を増やしてもいいと医師からの指示を受けた」と入力いただきました。実際に症状のコントロールにつながったという事例です。

この事例のポイントですが、ユーザーが、自分では意識していなかった処方の変化や、「最近、実は喘息発作がひどい」と漏らしたところから、ステロイド投薬量が増えているという事実をAIが検知しました。この調剤データがあったからこそ、症状がどうなっているかをAIが聞き取ることができました。データがなければ喘息がひどいというユーザーの自己申告だけで会話が終わっていた可能性がありますので、まさにきっかけを拾って、受診を促進できた事例ではないかと思っています。

16 ページ目です。この事例は、ユーザーが入力した検査結果と薬の情報から、ユーザーの勘違いを発見して、生活習慣を改善できたという事例です。左側からご説明します。

ユーザーが、「検査で血糖値が下がったので嬉しい。ただ、今度は尿タンパクが出るようになっていて、これがなぜだかわからない」と入力しました。AI パートナーが調剤履歴を確認すると、フォシーガという腎臓の保護効果も期待できる SGLT2 阻害薬が処方されており、また降圧剤のテルミサルタンの処方量も減っているというのが確認できました。AI が、「フォシーガには腎臓を守る働きもあるので、尿タンパクが出ているのは気になるね」と、何か生活習慣の心当たりはあるか聞いたところ、ユーザーが「血压が下がったので、ラーメンを解禁して最近週3、4回食べています」と入力しました。

真ん中の列です。「もしかしたら、塩分を急に摂るようになったことが腎機能に関係があるかもしれない」とAIが伝え、ユーザーが「血压が下がったので、塩分に関してはもう気にしなくてよくなった」と誤解をしていることがわかりました。AI が「塩分は血压にも腎臓にも影響があるので、医師に相談しましょう」と伝えています。他に心当たりのある生活習慣をAIが聞き取ったところ、月に4、5回ロキソニンを飲んでいということが会話からわかり、こちらに対しても、「ロキソニンはNSAIDs といって、腎機能が低下した人は注意が必要な薬です」と薬剤に対する一般的な情報を提供しました。

右側の列です。このユーザーの方は、「ラーメンとか塩分の濃い食事はすぐにやめました」と入力されました。「お薬も相談してみよう」と提案したところ、実際に薬をどう使っているのかも医師に相談されたということです。こちらでも先んじて調剤データがあったことで、誤解を発見できたという事例かと思います。

20 ページ目です。このような事例のように、広く多くのユーザーに利用いただくために期待していることを最後にお話します。ユーザーよりユビーが先に情報を把握している状態を目指したいと思っています。そのために、マイナポータルと連携のハードルを低くして、連携が切れにくく、更に多くのユーザーが取得対象であることが重要かと思っています。こういった点にもし対応していただけますと、より多くの方に体験を届けられるかと思うので、ぜひご検討いただければと思っています。ありがとうございました。

- 【主査】ありがとうございました。それではここから議題（3）に関する質疑に入ら

させていただきます。御質問・御意見がある方いらっしゃいますか。

- 【構成員】サービスの利用者のうち、何割くらいが実際にマイナポータル API と連携していますか。トレンドとして、どの程度の勢いで増えているのでしょうか。
- 【株式会社くすりの窓口】 当社のアプリは累計利用者数が 700 万人で、マイナポータル連携を利用されている方が約 110 万人という状況です。利用に関しては毎月右肩で上がっています。
- 【Ubie 株式会社】 数字自体直接公表していませんが、十万、数十万のオーダーで実際に連携していただいています。分布については、性別では女性と男性の方がほぼ同じぐらいで、女性の方が少し多くなっています。年代では、20 代から 50 代がボリュームゾーンです。60 代になるとその半分ぐらい、それ以降の年代は少なくなってくるという分布になっています。
- 【構成員】今後いわゆる高齢者、特に後期高齢者向けにユーザー数を増やしていくような努力はどのように行われる予定でしょうか。
- 【株式会社くすりの窓口】 ご高齢の方ご自身で管理されるのは難易度が高いと感じています。ご家族の方が代わりに管理することにフォーカスを当てて施策を検討しています。
- 【Ubie 株式会社】 2つ考えがあります。1 点目は、アプリ自体は 60 代、70 代の方にも使っていただいていますので、アプリの中でわかりやすい訴求を行うことや、AI との会話の中でご紹介することもやっているのも、そういうところでもう少し促進していきたいと思っています。2 点目は、弊社が行っている医療機関向け事業の中で、医療機関の業務効率化支援等も実施しています。例えば、弊社サービスを導入していただいている医療機関から患者に、自身で PHR 情報を見ていただくことをご紹介いただく等です。あるいはそれを通じて、次回、次々回の診察をよくするためのきっかけとしていただく形でご紹介いただくなど、実際に病院・クリニックに行ってもらえる方に対して、もう少し使っていただけないかと考えています。
- 【構成員】ありがとうございます。くすりの窓口さんへの質問の延長線上で、アプリで自分と親御さんの分をどちらも管理しようとしたときに、マルチアカウントでの管理がやりづらいと感じています。どのようにお考えですか。
- 【株式会社くすりの窓口】 マルチアカウント管理の難易度の問題はあると思っています。その中でも、親御さん世代の方を代わりに管理してあげようというきっかけを与えるための施策に全力を挙げようと考えています。
- 【構成員】ありがとうございます。逆に親が子供の管理をするケースも同様の問題がありますので、ご尽力いただければ臨床現場としては大変助かります。ユビーに関しては、独居老人の方にチャットボットとして相談に乗りつつも、入院時などお困りの際には行政サービスの紹介などの医療の前段階としてのソーシャルワーカー的な動きをしていただければ自治体も非常に喜ぶと思うので、ご一考くださると幸いです。

- 【構成員】アクティブユーザーのプロフィールと、実際に体験された方がそのまま継続をされる割合について伺いたいです。継続をされる方はどれくらいの年代層で、もともと健康に関心がある方なのかが気になっています。また、継続のために実施されている対策についても伺いたいです。
- 【株式会社くすりの窓口】 具体的な数字は公表していませんが、実際に利用している方の属性としては、女性では 30 代から 40 代、男性では 40 代から 50 代の方に主に利用いただいています。お子様向けにパパママ世代の方が管理されているユースケースも多いです。そもそも当社はお薬手帳アプリのため、もともと持病があり健康意識が高い方にご利用いただいていると思っています。そのため、一定の利用者と継続利用率が確保できている状況です。キャンペーンとしては、取得した情報を閲覧するのにとどまらず、その先に活用する機能をどんどん提供していき、事例や活用シーンをアウトプットしながら認知を広げていく動き方をする予定です。
- 【Ubie 株式会社】 プロフィールは先ほど申し上げた通り男性女性ほぼ同じで、年代のボリュームゾーンは 20 代から 50 代であり、60 代になると少し減ってくるという形になっています。継続利用については、新しく登録する人、あるいは更新する人に対して 2、3 割ぐらいの方は連携期間が切れてしまって、解除状態になってしまっている状況です。連携期間が切れる前に「もうすぐ期間が切れるので、再度カードをかざしてください」と通知をしています、このような数字となっています。連携期間中の 90 日間の間に「知らない間に AI パートナーがデータを使って何かしてくれた」という体験があると、マイナポータルの恩恵について体感され、またかざしていただける形になりますが、1 回カードをかざして取得されたデータを閲覧するだけだと 90 日後に連携を継続していただけないケースが結構あると思っています。ポイントとしては 2 つありまして、連携期間中にいかに「AI が先回りして、色々と相談に乗ってくれる」という体験を提供できるかということと、連携期間が 90 日であるということが大きく、もう少し長いとこの機会を提供しやすくなると思っています。
- 【構成員】今後を見越して、マイナポータルからだけでは不足している情報について先行して取り込みを実施されていたり、実際の現場で必要になる機能の追加をされたりしていますか。また、問診データの伝達に関して、病院側の受け入れインターフェースが追い付いていない中で、標準化以外にどのような取り組みで患者から医療機関への情報連携を容易にしていってお考えか伺いたいです。
- 【株式会社くすりの窓口】 当社ではもともとマイナポータル以前から、薬剤の情報を薬局の QR コード等から取得することには取り組んでおりました。先ほども少しだけ紹介させていただいた血圧手帳等の機能で、血圧の日常的な記録・体温や体重の記録を行えるよう、情報の拡充に努めています。ただ、それをうまくプロフィールに組み込めてはいないと感じています。プロフィールに組み込むことで、問診票について毎度同じようなものを書かないといけないといった問題も、リアルな情報が自動でウェブ問診と

いう形で反映されていれば、情報も最適化され、記録の煩雑さもなくせると思いますので、そういった部分により一層取り組んでいきたいと考えています。

- 【Ubie 株式会社】 1つ目の、不足している情報の部分については、弊社では最近では血圧・体重といったバイタルデータの取り込みと利活用を強化しています。例えば血圧の入力ができる、Google ヘルスコネクト・Apple ヘルスキットからデータ連携できるといった機能を追加していて、データを拡充していこうと思っています。2つ目の、患者から病院への情報提供をどうやって拡充するかについては、弊社は問診サービスを提供しており、これまでも弊社のサービスを導入していただいた医療機関さんには問診が送れるようになっておりました。デジタル・FAX で送信する場合がありますが、それ以外ではスマホの画面を見せていただくということに留まっています。弊社のサービスを入れていただいている病院、あるいはそれ以外の病院も含めて、もう少しデータを送りやすくしていくことに挑戦していきたいと思っています。

【構成員】問診は本来医師側、医療情報基盤で最初に確認する事項であり、PHR に問診を入れる際にはどういうタイミングで入れるのが論点になるのではないのでしょうか。PHR に問診を入れても、どの媒体で運用するかが大きな課題になると思います。医療機関の方も、マイナポータルを活用して色々なデータを吸い上げられる仕組みになれば良いと思います。また、マイナポータルを活用したサービスにおいて、医療機関等側が情報を確認するために事業者ごとに別々のシステムを導入する必要があると、施設によって確認ができたりできなかったりすることになるので、医療安全のためにも何らかの統一した仕組みで確認できるように協力しあって推進いただきたいです。

- 【構成員】先ほどの、家庭で計測する血圧などのライフログを医療機関とつなぐ取り組みは、総務省の AMED 事業でも進んでおりまして、PHR 事業者にもその基盤と連携して一緒に医療機関とつながってほしいです。総務省にご紹介いただいて、連携の可能性を広げられたらと思います。また、一点質問があります。連携期間を 90 日より伸ばすことについてですが、ユーザビリティとリスクのバランスの問題になると思っています。iPhone のマイナンバー連携のように連携の操作が簡単になればあまり困らなくなり、セキュリティを担保するためにも、無制限に延長する方向ではない方がむしろ良いのではないかと考えます。この点についてご感想をいただければと思います。
- 【株式会社くすりの窓口】 私もほぼ同意見です。マイナンバーカードをスマートフォンに登録してから利便性が高まっていると感じています。90 日の期間についての議論は、そこまで重要ではないのかもしれないと思っています。
- 【Ubie 株式会社】 スマホにマイナンバーカードが搭載されることが事業者として一番インパクトがあり、広がり期待しています。期間の延長についても、そうなればあまり大きな問題にならないのではないかと思います。その問題については、デジタル庁さんと議論させていただきたいです。
- 【構成員】高齢者の方への訴求の結果、便利な PHR サービスが普及していくのは望ま

しい一方で、現在のクラウド環境や内部不正、外部脅威など、昨今のセキュリティ情勢を考えるとリスクが高まっていると感じます。セキュリティに対する投資を増やすことについてのお考えをお伺いしたいです。

- 【株式会社くすりの窓口】 セキュリティの部分に関しては今もですが、重要ポイントとして強化しています。今後に関しても、利用するデータはどんどん広がっていきますので、さらにその強化は重点的に行っていくというスタンスで進めています。
- 【Ubie 株式会社】 同じく、すでにマイナポータルを利用しているので、セキュリティには対応していますが、引き続き対策を進めていければと思っています。データの使われ方のガイドライン作りなども協力して引き続き進めてまいりたいと思っています。
- 【主査】 それでは、議題（３）はこのあたりとさせていただきます。

議題（４）意見交換

- 【主査】 議題（４）意見交換に入らせていただきます。本日は、
テーマ①：マイナポータル API での健康・医療情報連携の仕組みにより、民間 PHR サービスでの活用が徐々に進んでいる。こうした動きを、今後も民間事業者と連携し、拡大していくためには、今後どのような観点での注力、アプローチが求められるか。
テーマ②：民間事業者のサービスも多様化する中、ユースケースの拡大に向けてどのような点に留意しながら推進すべきか。
について議論いたします。
まずはテーマ①について、ご意見がある方がいらっしゃいましたら、お願いいたします。
- 【構成員】冒頭にも申し上げましたが、やはりマイナポータルから持ってくるデータについてどこで責任を切るのかという点について、ここがクリアになることによって、用途の制限等も含めて議論が深まっていくと考えています。実際の用途として、いわゆる一次利用に近いようなレコメンデーション、自社のサービス等の改良につながるもの、他社サービスとの連携を模索するもの、各種マーケティングに使用するものもあります。こういうものの中には情報提供と、いわゆる物販がどうしても重なって見える世界というのは存在すると思います。その意味で、「マイナポータルから情報を取得したからここまで細かい規制をかけるべきだ」という議論よりも、責任分界点を明確にすることによって、逆に民間事業者としての事業取り組みの柔軟性を担保するということも、視点としては加えてはどうかと考えました。
- 【主査】 柔軟性というのは、マイナポータル連携の申請を審査する際の話でしょうか。
- 【構成員】 審査の時に、何か特定のものを禁止するような縛りを先にかけることなく受け付けるという意味で申し上げました。今ですと、広告用途に利用できない等の書きぶりが一部資料にありましたので、その点が気になって発言しました。

- 【構成員】今までも議論があったように、マイナポータル API で出される情報に加えて、先ほどのライフログ情報等それぞれのサービスが付加価値をつけていくと思います。他の情報と組み合わせると、価値が生まれて、さらにサービスが広がっていくというような、ユースケースを広げていくという視点がすごく大事ではないでしょうか。あるいはそれに関連するルール作り等、論点・課題を整理していくべきかと思いました。
- 【構成員】事例を拝見して、健康関心層やヘルスリテラシーの高い層については活用が進んでいる一方で、電子情報技術産業協会でも、健康無関心層にどうやって広がっていくかが非常に課題になっています。デジタル庁資料5ページ目のところで挙げられている、ローン審査で収入証明書をマイナポータル経由で取得した人や婚活サービスで戸籍抄本・独身証明書を取得した人についてはマイナポータル API 連携の良さがわかっていると思います。マイナポータル API の良さを分かっていたら、さらに PHR に利用していただくという2段階のハードルを乗り越えるよりは、マイナポータル API 連携の良さを分かっている方に PHR サービスをお勧めすることも、アプローチとしては良いのではないかと思います。そのために、サービス同士でお互いにアプローチし合うような仕組みがあるといいのではないのでしょうか。
- 【構成員】マイナポータル API を使っているサービス同士が連携することもそうだし、あとはその先ほどの PHR のライフログ情報を使っている者同士が、先ほどの基盤でつながるサービス同士の連携、あるいは医療機関との連携は、横のつながりで全体がそれぞれ発展していくという視点でのユースケースをどんどん広げて欲しいと思います。
- 【構成員】一つ懸念として思っているのは、良心的な業者ばかり入ってくるわけではなく、高額な診療費に誘導したり、怪しげな民間療法に誘導したりするような事業者が入ってこないかという点です。そういう意味では、どこかで何か規制みたいなもの、もしくは監視できるようなものが必要なのかなということも考えています。
- 【構成員】テーマ①について、主語は全国医療情報プラットフォームなのか、医療情報基盤なのか、PHR サービスなのかどれになりますか。
- 【主査】この作業班は、民間 PHR サービスの、マイナポータル API を用いるときの利活用を考えるものであるため、視点はまず民間 PHR からということになっています。
- 【構成員】怪しげな事業者が入ってくるという懸念について、先ほどの総務省の AMED 事業の中でも重要な論点だと考えています。マイナポータル API から出された情報について、サービス間が連携すればするほど、さらに事業者が流れてくる可能性がありますので、その時の課題についてはしっかり AMED 事業の方でも整理をし、検討を進めています。重要なポイントであると思っています。

- 【構成員】PHR の大きな目的の一つは、個人の健康意識の改善と醸成にあると思っています。そのため、PHR データの個人への提供方法については、単発利用ではなく継続利用による行動変容の継続を促すようにすべきであることが課題であると思います。現在のマイナポータル API は、どちらかというと行政データを開示するといった前提に立っているような印象を受けておりまして、今後利用拡大に向けては、生活者体験前提の API の検討が必要ではないかと考えています。その行動変容の継続にあたりまして、先ほどの Ubie さんの資料にもありましたが、90 日ごとの再同意、データの更新の遅延、プル型での更新確認が継続利用を阻害する要因であることは私も同感です。90 日ごとの再同意についてはセキュリティの低下の問題もある一方で、健康意識の低い人はそもそもアプリを起動しないと思われるので、連携期間が延びたことで事業者から通知を受け取る機会も増え、それがアプリを起動する契機となるのではと思います。あともう一点、PHR は原則として同意ベースで運用されることになっているという認識ですが、同意 UI は現状、事業者任せの状態となっていることが言えると思います。PHR データの利用に関するユーザーの理解促進を図るために、例えば同意画面の標準化や、同意文書のテンプレート化といったことも、国主導で検討していただければと考えています。
- 【主査】同意というのは、具体的にはどのようなイメージでしょうか。PHR の利用の同意か、二次利用の同意かどちらでしょうか。
- 【構成員】どちらも含まれると思っています。
- 【構成員】同意のプロセス、どの程度の同意なり自分の意思の表示であるべきかという点も、AMED 事業の方で検討を進めており、AMED 事業としても報告させていただきたいと思っています。そういう意味でも、ユーザーがたくさんいる Ubie さん、くすりの窓口さんのようなサービス事業者にも議論にご参加いただいて、ぜひみんなが使えるような同意やある程度標準的なフォーマットについて AMED 事業側からも提案していきたいなと思いました。
- 【主査】テーマ②：民間事業者のサービスも多様化する中、ユースケースの拡大に向けてどのような点に留意しながら推進すべきか。
についてはいかがでしょうか。
- 【構成員】先ほどどなたかもおっしゃっておられましたが、あまりにもガチガチの規制があるとなかなか広がっていかないの、最低限これだけを守るべきというようなルールを設定して、その上で自由に民間の方々ができるような環境を整備してあげるのが一番良いのかなと思っています。
- 【主査】マイナポータル API は多くの国民が利用できるという状況のもとで、求められなければいけないことは、国民のヘルスリテラシーを抜本的に向上させることではないでしょうか。中高生ぐらいできっちりと教育する必要があると思います。今までは

中高生で利用できる自分に対する健康情報はなかったですが、今はマイナポータル API を使って、PHR を使えば、数少ないものの、自分に対する健康情報が自分のものとして入ってくる。その前提のもとに、ヘルスリテラシーを広げることが本人の人生のためにも、社会と健全性のためにも、非常に重要であると思います。

- **【構成員】** 私たちが一番危惧しているのは、過去情報の非継続です。小学校からずっと測り続けている、健康カードと言われているものが義務教育の間キープされていますが、卒業した途端に個人情報だからと 5 年後には捨てられています。成長曲線をいただけたら、当然、いろんな基礎疾患が見つかってくるケースが多々あります。特に毎年実施しているスポーツテストについても、50m 走、サイドステップ、前屈などのデータがあります。したがって決して今も学生、あるいは小中高生がデータを持ってないかという、そうではないです。それ自体を管理できてないというのが最大の課題ではないかと思います。私はそういったデータを PHR に取り込むことによって、次の世代が PHR に対して非常に親近感も持ってくれることを期待しています。
- **【主査】** 文部科学省の方で検討はされていると聞いていますが、実現はされていないようです。
- **【構成員】** おっしゃる通り教育が不可欠だと思いますし、一番使うべきは健康診断のデータだと思います。次のステップはマイナポータルを通じて子どもたちにデータを返し、そこで学校教育がなされ、国民すべてがデジタルリテラシーとヘルスリテラシーを高めて医療につなげていく。そういう大きなビジョンを国の中でも描いていくことで、この仕組みがさらに国民に広がっていくと思いましたので、ぜひその方向に向けて、次のステップを検討いただきたいと思います。
- **【事務局】** 冒頭お答えできなかったご質問に回答します。マイナポータル API へのアクセスは月で約 80 万人前後です。年齢等の情報は分からない構造になっておりました。学校保健のお話については、デジタル行財政改革の方でも文部科学省と相談してマイナポータルとの連携を検討していますが、実装までは至っていないという状況です。色々な健診等が各所管で行われているような状況ですが、国民の UI としてはマイナポータルで一元的になり、そこから出てくる API も一元的になっていくことによって、所管やデータベースが別であったとしても一元化を実現できるかなと思っています。PHR と病院の情報連携については、現在の全体的なシステムアーキテクチャを見ると、医療機関同士が連携し、その連携結果を患者がマイナポータルで閲覧するという構造になっているので、「多くの人に共通して必要な情報」を選び、マイナポータルを介して連携する仕組みになっていると思っています。そのため、病院と PHR のすべての情報連携をマイナポータル経由で行うようにすると、扱う情報範囲がさらに広がるため、果たしてそれが適切なのかという議論も必要だと考えています。私たちの方で、電子カルテの標準化についても議論しています。電子カルテをクラウド化し、標準的な API を切り出してもらった上で、そこに問診も含まれるような業務効率化アプリが直接アクセスできるようにすれば、電子カルテとこれらのアプリ、そして PHR との間で API に

よる直接連携が可能になると考えています。マイナポータルの、情報の審査をどれだけ規制していくかは、私どもの今の立ち位置としては、やはり医療情報は非常に機微性がある、その利活用については国民の方の信頼をもとに出していくものであると思っています。使ったとしても現時点においては、利用目的等で国民の方が安心して使用できるようなサービスを、確認させていただきながらお出しさせていただいています。私の方でお答えできるところについて、ご説明しました。

- **【構成員】**今の、最初はやはり安心安全を優先してやっていくという戦略がすごく大事ではないかと思っています。安心安全が損なわれると広がるものも広がらなくなってしまうので、最初だけはそれで良いのではないかなと。そういうコンセンスが大事かなと思いました。
- **【主査】**構成員の方から発言があったように、今発展している産業分野であり、結構玉石混交になっているところがあると思います。最初はかなり慎重に行くというのは大事だと思います。活発な御議論ありがとうございました。今日の二つのテーマに関して、もしまだご意見ございましたら、この会議終了後で、事務局の方にお伝えいただいても結構です。よろしくお願いいたします。それでは、事務局の方にお戻しいたします。
- **【事務局】** 山本主査、ありがとうございました。次回のスケジュールにつきましては、決まり次第追ってご連絡いたします。また、本日の議事要旨につきましては後ほど作成し、ご確認いただいた後公表とさせていただきますがよろしいでしょうか。御異議がないようですので、そのようにさせていただきます。また、詳しいご説明はメール等で事務局より個別にご連絡をさせていただきます。本日はありがとうございました。

——— 了 ———